



▲大分大学病院は1月から院外処方箋に血液検査などの検査値の表記を始めた

▼検査値の項目が入った処方箋

メモ 厚生労働省は、住んでいる地域で1人1カ所ずつ「かかりつけの薬局」を持つように検討を進めている。症状ごとに違う病院に通う患者などの薬を一元管理して効果の最大化や薬の飲み残しなどを防ぐ。2025年度までの体制づくりを目指している。

大分大学病院の院外処方箋

身体情報や検査値記入

大分大学病院(津村院長)は1月から、外来で受診した患者の処方箋に血液検査の検査値などの身体情報を記入している。同病院が出す年間約1万3千件の処方箋のうち、約1万1千件が院外処方。県外など遠方から訪れる患者も多く、病院と調剤薬局が患者の情報を共有できれば、薬剤の適正管理の指導や副作用の初期症状の発見に役立つと期待されている。

処方箋には患者の身長や体重、体表面積の他、血液検査で調べる肝臓や腎臓の検査値などを記入する。調剤薬局は身体情報を把握することで①検査値に基づく服薬量や副作用の確認②薬の効果の評価③0人が血液検査の数値の見出やすい副作用についての事前説明④副作用の早期発見ができるようになる。

薬局と連携し適正管理 副作用の早期発見に

副作用の早期発見に期待

同病院薬剤部の伊東弘樹教授は「お薬手帳の持参率は約6割で患者全員を指導するの

なつており、診察して処方箋を決める医師と薬を調合する薬剤師を独立させて役割を分けている。薬剤師は飲み合わせや患者の状態などを判断して副作用などが見込まれる場合は医師に助言する。厚生労働省は、重い副作用を早期に発見するためにも患者の検査結果などに注意して薬を提供す

て管理できなかったり、飲み合わせが悪く副作用が大きくなる問題が深刻化しており、薬の適正管理は大きな課題となっている。医療機関は、薬の記録を「お薬手帳」にまとめて管理することを勧めてい

するシステムは重要」と説明。「将来的には、患者一人一人がかかりつけ薬局を持ち、薬局が患者の薬の情報を一元的に管理することも必要になるのではないか」と話した。

薬の処方は「医薬分業」と

方、副作用や薬の飲み合わせによる数値の変化の関係などを学んだ。近年、複数の疾患を抱える高齢者には難しい。高齢化に伴い、薬の重要性を指摘する。全国で管理しきれない高齢者がさらに増えることも予想される。病院と薬局が連携して、が進んでいる。